

回遊式庭園を参照した現代建築の設計論にみる伝統の反映手法

Methods of Reflecting Tradition in Contemporary Architect's Design Theories with Reference to Japanese Stroll Gardens

奥山研究室 24M50856 西岡 洋亮 (NISHIOKA, Yosuke)

1. 序 現代建築において、伝統的な建築の形式やイメージをどのように参照し、現代の文脈に位置付けるのかは重要なテーマとなり得る。とりわけ日本の伝統的な庭園と建築の様式のひとつである回遊式庭園¹⁾は、その代表的な参照対象となってきた。例えば谷口吉生は土門拳記念館の設計において、移動に伴い景観が移り変わる庭園的体験の建築空間化を試みている²⁾。このような建築家の設計論からは、伝統を現代建築へ反映する多様な設計手法を見出すことができる。

そこで本研究では、回遊式庭園を参照した現代建築作品の設計論を資料とし³⁾、建築家がいかに回遊式庭園を捉え、設計へ反映しているかを検討することで、建築的伝統を現代の文脈に位置付ける建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする。

2. 回遊式庭園の認識 図1の分析例において、「絵巻物が絵詞を区切りとして一段落し、回遊式庭園においても石段や灯がその段落として機能する」と述べられており、絵巻物との類似性から回遊式庭園を認識していることが読み取れる。そこで本章では、こうした建築家の回遊式庭園に対する認識を資料から抽出し、その内容をKJ法⁴⁾によって比較・検討した。その結果、**【空間的認識】**と**【時間的認識】**(以下、**【空間】****【時間】**)の2つの大枠で捉えることができた(図2)。

【空間】は、回遊式庭園を空間的な側面から捉えるもので、**【建築と庭の関係】**、**【内と外の関係】**、**【自然との関係】****【視覚的な空間】**などがみられた。**【時間】**は、回遊式庭園を時間的な側面から捉えるもので、特に**【歴史との関**

係】では、**【歴史の象徴】**や**【文化との関係】**、桂離宮を**【モダニズムとの関係】**から捉えるものなどがみられた。また、移動による空間のシーケンスの変化や季節の移ろいといった**【空間】**と**【時間】**を併せ持つ認識もみられ、これらを**【変化する体験】**として捉えた。

3. 回遊式庭園の着目内容 図1の分析例において、設計者が「石段」と「灯籠」の配列に着目して設計していることが読み取れる。そこで本章では、回遊式庭園を参照するうえで着目した対象および性質を抽出し、検討する。

3-1. 着目対象 着目対象の内容を図3のように整理したところ、**【回遊式庭園全体】**に着目したものが最も多く、建築に関するものについては、複数の建築に着目した**【建築群】**、単体の建築に着目した**【建築単体】**、その屋根や縁側など特定の部分に着目した**【建築部位】**がそれぞれ同数程度みられた。庭園に関するものについては、**【園路】**が最も多く、回遊式庭園での回遊性を担う園路が着目対象として注目されやすいといえる。次いで、庭園全体に着目した**【庭園全体】**や池・植栽等に着目した**【水景・植物】**、橋・飛石・灯籠等に着目した**【庭園要素】**がそれぞれ同数程度みられた。

3-2. 着目性質 着目対象のどのような側面に着目しているかを着目性質として抽出し、その内容を検討した結果、**【配列】****【形態】****【仕上・工法】****【機能】****【意味】**の5つで捉えることができた(図4)。

3-3. 着目対象と着目性質の対応関係 着目対象と着目性質の対応関係から、着目内容を検討したのが図5である。**【回遊式庭園全体】**と**【建築群】**では**【配列】**が最も多く、

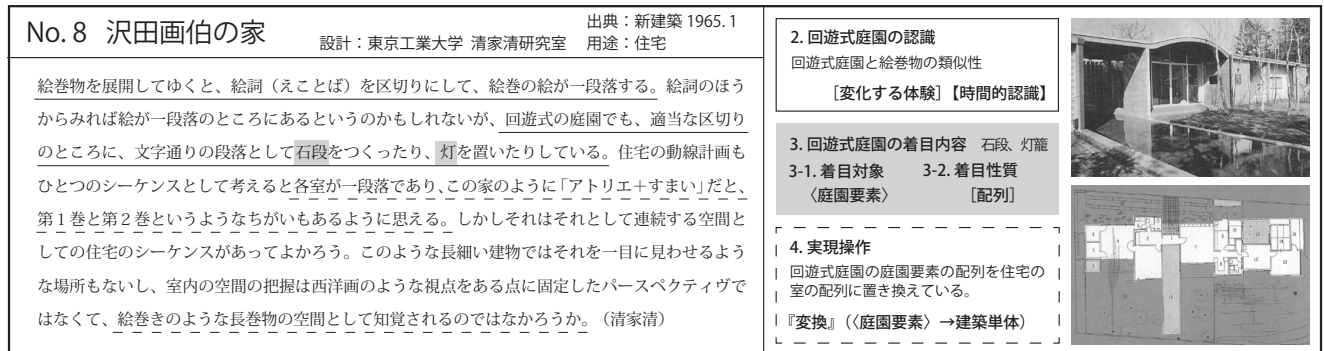


図1. 分析例

建築と庭園の配置構成や建築の分散配置が目目されていることが分かる。一方で、〈建築単体〉や〈建築部位〉においては [形態] が中心となり、対象の範囲が狭まるにつれて、即物的なかたちが重点的に扱われやすいと考えられる。また、〈水景・植物〉では [意味] が最も多く、水景のもつ象徴性などが重視される傾向にあり、〈園路〉においては [配列] が最も多く、園路での移動に伴うシークエンスや空間の変化が目目されているといえる。

4. 実現操作 資料から、着目内容は作品において必ずしも直接的に用いられず、多くの場合現代建築的な要素に置き換えられるなど、修辭的な操作とともに表現されていることが読み取れる。そこで本章では、着目内容を作品に表現する操作（以下、実現操作）を、着目性質の変容と、作品のどのような箇所に着目内容を適用させているか（以下、実現対象）の観点から検討した（図6,7）。例えばNo.78-①では、〈園路〉の [配列] を立体的に

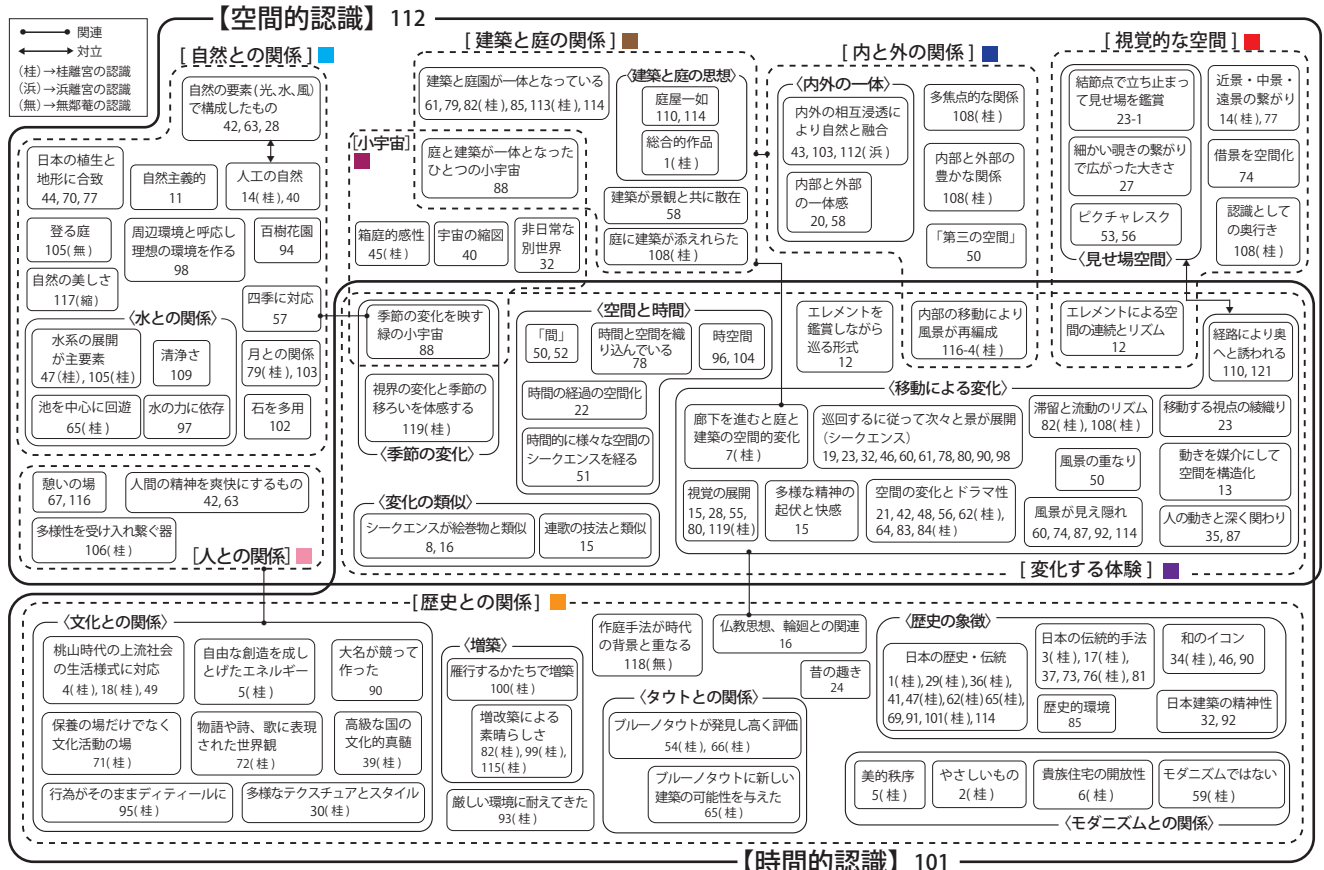


図2. 回遊式庭園の認識

建築+庭園	建築 69	庭園 71
〈回遊式庭園全体〉 39	〈建築群〉 21 〈建築単体〉 28 〈建築部位〉 20	〈庭園全体〉 12 〈水景・植物〉 16 〈園路〉 30 〈庭園要素〉 13
〈回〉	〈建群〉	〈庭全〉

図3. 着目対象

[配列] 92		着目対象の並べ方 「回遊式」	[機能] 12		着目対象の機能 緑の「役割」
[形態] 37		着目対象のかたち 「雁行平面」	[意味] 28		着目対象の象徴性 水の「存在」
[仕上- 工法] 10		着目対象の 施工法や仕上 壁の「仕上」			

図註) 121の作品から179の着目対象(着目性質)が抽出された。以降では、これらを個別の資料単位として検討する。

図4. 着目性質

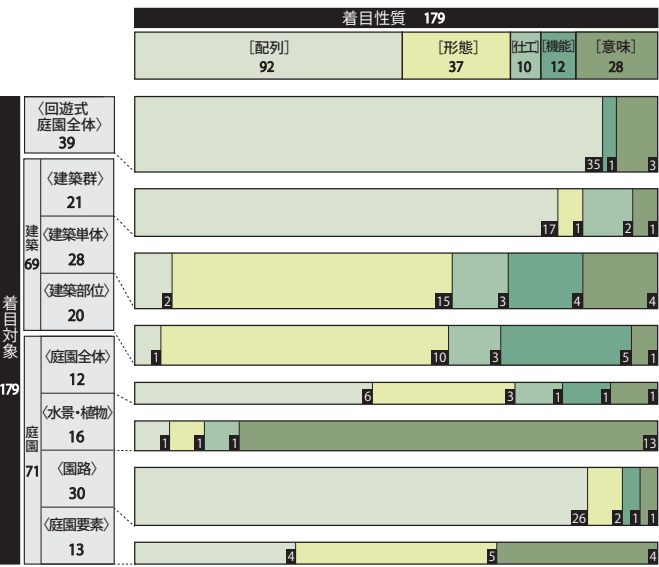


図5. 着目対象と着目性質との対応関係

展開しており、平面的な「配列」を立体的に変化させることで、着目性質に変容を生じさせている。また No.85 では、連続する園路のシーケンスに取って代わって閉じた室を挟み込むことで、園路の「配列」を変容させている。このような着目性質の変容の有無と、それぞれの着目対象と実現対象との一致・不一致という二つの条件の組合せによって、実現操作として『置換』『変換』『転換』『変転』の4つを捉えた。また、着目内容を現代建築的な要素に置き換えず、実現操作が捉えられないものを『直接引用』として区別した。

5. 回遊式庭園の反映手法 これまで検討した回遊式庭園の認識・着目内容・実現操作の対応関係から、回遊式庭園の現代建築への反映手法を位置づける。縦軸に実現操作、横軸に着目性質を配置し、三者の対応関係を検討したのが図8である。

『置換』『変換』『変転』では「配列」が最も多く、『転換』では「配列」と「形態」が同数であり、『直接引用』では「意味」が最も多くの割合を占めた。該当数が多く、特徴的な傾向がみられたA~Eのグループを反映手法の典型と捉え、それぞれの特徴を明らかにする。

最も事例数の多いAでは、〈回遊式庭園全体〉と〈建築群〉に着目する事例が多く(27/34)、それらの「配列」が『置換』によって現代建築に反映されやすいことが分かる。例えばNo.43-①では、回遊式庭園の建築群の配列が、分散配置としてそれぞれ特徴を持ったボリュームに置き換えられている。Bでは、「歴史との関係」の認識を持ち、〈建築単体〉と〈建築群〉に着目した事例が多く(8/17)、歴史的な建築の「形態」が『置換』によって現代建築に反

映されている傾向を読み取れる。例えばNo.46-①では、回遊式庭園の数寄屋建築を日本の歴史的なアイコンとして認識し、その形態を簡素化するとともに、コンクリートなどの要素に置き換えている。CとDでは、「変化する体験」の認識を持ち、〈回遊式庭園全体〉と〈園路〉の「配列」に着目した事例が多くみられる(15/32)(11/20)。これらは回遊のシーケンスや場面の展開を回遊式庭園の特徴と捉え、それらをそれぞれ『変換』と『変転』によって作品に反映させていると考えられる。例えば『変換』を用いたNo.22では、回遊式庭園の回遊のシーケンスを、建築の内部空間の明暗や位置の高低をつくり出すことで表現している。また『変転』を用いたNo.74-①では、住宅の花見台を階段やブリッジにより風景が見え隠れする立体的な苑露として表現しており、〈園路〉の「配列」を立体的に変化させている。一方、『直接引用』かつ「意味」のEでは、「自然との関係」の認識を持ち〈水景・植物〉に着目した事例が多く(9/17)、水景や自然のもつ象徴性を直接作品に用いる傾向にあることが分かる。例えばNo.63-②では、庭園の構成要素である光、水、風の象徴性に着目する意図がみられる。

以上より、Bのように回遊式庭園を歴史との関係から捉える場合には、建築の即物的な形態が主要な着目内容となり、それらを現代建築的な要素へと置き換えて作品に反映する手法が用いられる傾向があるといえる。一方CとDのように、変化する体験の観点から捉える場合には、その体験を成立させる園路や回遊式庭園全体の配列が重視され、それらを建築の内部空間に変換したり、立体的に展開したりする手法が用いられると考えられる。

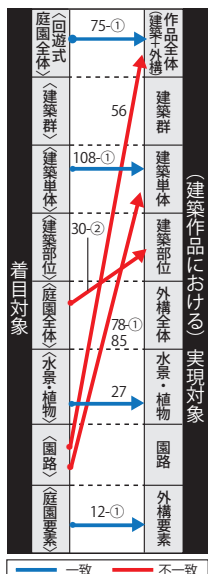


図6. 実現対象と着目対象

着目性質の変容	着目対象と実現対象が一致	
	『置換』	『転換』
着目対象と実現対象が一致	<p>75-① 1階を透明ガラス・ピロティとすることで、日本庭園の座式・定機式の視点をこの建築に導入し、日本庭園と書院の関係のような空間とすることを考えている。</p>	<p>27 連続した緑道は、線状の回遊式庭園といえる。…水景の展開を主要素とする回遊式庭園の技法は、非常に有効である。…その場その場の景色を重点的に創造し、それが繋がっていく…</p>
着目対象と実現対象が不一致	<p>12-① 庭園は1本の木立、景石、石灯笼、一つ一つが視覚的な注意を喚起するしるべがあったりする。…実際の行動は掲示板、彫刻、石畳み、フラグポールなどを目当てに迂回しながら玄関に辿るレイアウトを与えた。</p>	<p>85 このシーケンスの展開が、いわゆる回遊式庭園の場合とやや趣を異にするのは、そのプロセスに展示室という閉じた空間が挟み込まれていること。</p>
着目対象なし	<p>56 明と暗、暑と涼、烈風とそよ風…その両極を意識する…特有の動線に従って、空間を移動するにつれ常に何かを発見し、異なるシーケンスを通過するという、ビジュアルレスクな回遊式庭園に近い空間体験をする…</p>	<p>108-① 思い切って佳の平面に切り込みを入れ、ぐるっと回遊させて円環状に閉じるような形式であれば、…立体的にもぐるぐる」と連続する、「円側」とでも呼べるような建築の成り立ちのイメージである。</p>
着目性質の変容あり	<p>30-② 松琴亭の周囲は当然ながら庭園である。前庭には池(那智黒を敷き水を張る)と霧(紗幕)その両側に石造を暗示する導入部(モルタル塗り)とメタルの扉(波型亜鉛鉄板)とスツシユ。</p>	<p>78-① 様々なタイプの住戸を積み重ねて回遊線をつなぎ、そこにストーリーを与えた。…歩を進めるに従って次々と展開するシーン、…時間と空間を織り込んだ、立体的な回遊式庭園となった。</p>

図7. 実現操作

6. 結 以上、回遊式庭園を参照した現代建築の設計論を資料とし、回遊式庭園の認識・着目内容・実現操作から、回遊式庭園の現代建築への反映手法を検討した。その結果、歴史的に重要な建築の形態を現代建築的な要素に置き換える手法に加え、変化に富む園路のシークエンスを建築の内部空間に取り入れる手法や、立体的に展開させる手法といった特徴的な反映手法を捉えることができた。現代建築家は回遊式庭園を伝統の一形式と捉え、多くの建築作品に回遊式庭園を反映させてきた。本研究で明

らかにした回遊式庭園の反映手法は、個別の事例にとどまらず、現代建築における伝統の反映の在り方を考察する上での有効な枠組みを与えるものと考えられる。

- 註1) 近世に初めて現れた庭園形式の一つ。池の周りに園路をめぐらし、その園路沿いに日本文学の古典に知られている名所旧跡を再現した景や灯籠、田舎家、仏堂、祠、滝、橋などの要素を配し、契起的体験を通じて庭の景を鑑賞する庭園。現存のものとして桂離宮が最も古く、最大であったと思われるものに尾張徳川家の戸山荘、そのほか六義園、後楽園(江戸と岡山)、兼六園、栗林荘などがある。朝日社『建築大辞典』
- 2) 新建築 1983年12月号
- 3) 1945年以降の建築専門誌等に掲載された現代建築作品のうち、設計者による解説文から、回遊式庭園を参照して設計されたことが明確に読み取れた121作品を対象作品とする。
- 4) 川喜田二郎:『発想法』,中公新書,1967年

